



No.220

ティークレイク
Tea Break

父の日に

会員 正林 真之

6月の第3日曜日の父の日を、実はこれを今年は、家族からの祝福によって初めて知ることになった。大学生の娘が健康原料を使ったチョコケーキを焼いていたので、何ごとかと思って聞いてみたら、なんと「父の日」なのでということであった。まあ、よくぞここまで成長してくれたと思うし、もうこんな年になるのに父親に親しんでくれる。こんな幸福感を味わいながらも、さてどうして今年は父の日を忘れていたのか。多少の焦りを伴いながらも、そう思ったのである。

よくよく思い起こしてみれば、自分の父親も、父の日というものをすっかり忘れていたことが何度もあった。子供の頃の自分としては、なぜ父がそのような有名かつ重要な日をすっかり忘れてしまうのか、本当に不思議に思ったものだ。よく考えてみると、父は自分の誕生日すら忘れていたこともあった。

もちろんそれは、子供の頃にはひどく奇妙であったが、「大人というのは結構、心の余裕なく働いているのだ」ということを知らなかっただけで、今や大人となった自分にしてみれば、それは本当によく理解できる。けれども、自分の誕生日を忘れてしまっているのと、父の日を忘れてしまっているのでは、何となく次元が違うような気がする。どちらも、「家族が祝福してくれるだろうからなあ…」ということで、仕事を早めに切り上げて帰ったりするような気を遣うものなのであるが、父の日の場合には、昨年まで、自分以外にお祝いする相手がいたのだ。

そう、私の父親は昨年末の年の瀬も迫った時期に急死した。そして昨年までは、「ああ、父の日が近いなあ。今年は何を贈ろうか…」なんて、喜寿や米寿のような齢の区切りとかを計算しながら考えていたものだから、同じく自分の家族もそんなふうにいるんだらうと思って、ちょっとワクワクしながら父の日を迎えていたものだ。

けれども今年は、お祝いすべき父は、もうこの世にはいない。そして私の父は、20代のまだ若き時代に自分の父親を亡くしている。父の日に父親を祝福する回数など、この私よりもはるかに少なかったはずである。そして、自分がお祝いしないものだから、自分がお祝いされることも忘れてしまう。そう、もし自分が祝福する人間を失ってしまったら、その日など全く見えなくなってしまう。私が今年は父の日を忘れてしまったのは、それは、昨年末に父が亡くなり、自分にとって父の日を祝う人間がいなくなってしまうからである。

ところで、もし「元気なままで、短く生きる道」と、「元気ではないが、長生きできる道」という選択肢があった場合には、どちら選ぶことになるのだろうか。最近では「健康寿命」ということが言われ、ただ長生きしても意味が無いようなことをよく聞くようになったし、当の本人からすればそう思うのが当たり前だろう。例えば、自分がガンになったとして、抗がん剤を使えば長く生きることができるが、元気ではなくなる。辛い副作用を伴った暗い日々が続く。けれども、抗がん剤を使わなければ、元気ではあるが、早く死ぬことになるとしたら、いったいどちらを選ぶことになるのだろうか。ちなみに父は結局、5年もの間にわたって介護施設に居続けることになり、弟の跡取りとしての成長を待つかのようにして亡くなっていった。

四十九日を過ぎた今となっても、これを弟と話すことがある。決して自慢できるような父親ではなく、むしろ親としては最低なことばかりをしてきたような男ではあるが、もし親父が早くに死んでいたら、やはり張り合いは無かったろう。弟も、コロナ下で経営が苦しく、何度も家業を畳もうかとも考えたが、親父が生きているうちに潰すわけにはいかない。まし

てや、あんな父親よりも先に死ぬわけにはいかない。そんなふうを考えて、歯を食いしばって頑張っていた時期もあるという。

ではその父が亡くなって、父の日を忘れたのかと弟に聞いてみると、その日を子供が楽しみに口にするものだから忘れられるどころではなかったらしい。そう、外食もしたいし、外出して遊びにも行きたいまだ小さな彼の息子が、前の週から指折り数えては、来週は父の日だからと何かにつけて弟にせがんでいたらしい。だから、忘れるわけなんかないという。

そういえば、自分にもそんなことがあった。自分が子供の頃もそうであったが、父となってからも、当時はディズニーランドに行くと、父の日のピンバッジを配布してくれていたりで、それをお目当てに子供たちとよく行ったりしたものだ。その時には、父の日を楽しみに指折り数えていたのだから、忘れるわけなんかない。

けれども今では、子供たちも成長し、父の日は指折り数えて待つ日ではなく、サプライズの日になった。むろん、サプライズするほうも、サプライズされるほうも、何かと気を遣う。でも、それがむしろ良いのかもしれない。そして、そのサプライズも、今は家族の皆で示し合わせて行われていたものが、いつの間にか個々にやるようになり、さらには次は各々の家族で考えてやるようになる。

もし自分が先の選択肢を選ぶ岐路に立たされた時、以前であれば「太く短く」を何の迷いもなく選んだものが、今年の日を迎え、チョコケーキを焼く娘と、ゴッドファーザーの写真を飾る息子を見ていると、「細く長く」の選択肢もありかと思う。そう思うのも自分が年を取ったからだと思うと少し切ないが、たとえ健康寿命でなくとも、長く生きる価値はあるようにも思える。今になってはもう聞く由もないが、今回の父の日を迎えてようやく、もっとたくさん父親と話してみべきだったと、心の底からそう思うのである。